

道博協ニュース

第40号

発行 平成4年11月15日
発行所 北海道博物館協会
事務局 札幌市厚別区厚別町小野幌
北海道開拓記念館内
電話 011-898-0456
FAX 011-898-2657

第40回全国博物館大会報告

—平成四年十一月五日、六日、徳島県大会—

平成四年度の第40回全国博物館大会は、十一月五日と六日の両日、徳島県郷土文化会館において全国から約三百五十人の博物館関係者が参加して開催されました。

大会一日目の午前は、開会式と顕彰・表彰式その他、全体会議と文部省生涯学習局の水野豊社会教育課長の行政報告が行なわれました。午後からは全国博物館会議とシンポジウムが行なわれ、最後に地元徳島市川内中学民芸部の人が

採択され、閉会式の席上、北海道開拓記念館の渡邊左武郎館長（北海道博物館協会会長）より来年度の第41回全国博物館大会を、平成五年十月二十日と二十一日の両日、札幌市教育文化会館を会場にして開催の予定である旨の表明がありました。

また、大会終了後の十一月七日に徳島市内の施設視察、七、八日には徳島県内の視察旅行が実施されました。この視察旅行は徳島県の東から西に縦断するコースで、七日は阿波藍の旧家・田中家、そして現在も藍を生産している佐藤家、阿波和紙伝統産業会館、国指定天然記念物の土柱、脇町の卯建物の町並、段の塚穴古墳。八日は祖谷かずら橋と祖谷宝物館、平家屋敷、大歩危・小歩危の舟下り、善蔵寺など地質・考古学や伝統工芸・産業、歴史、観光と盛り沢山の内容でありました。

この徳島大会のテーマは、前年度の第39回東京大会に引続く「新しい世紀をめざす博物館—期待される博物館像—」



開会の挨拶をされる津軽日博協会長



来年度の全国大会開催を表明する渡邊会長





大会2日目のフォーラム

でした。シンポジウムとフォーラムは、このテーマに即した①人々は博物館に何を求めているか、②人々に好まれる博物館環境は、③博物館にどのような人が来るか、どのよう人が来ないか、④博物館が社会の理解を得るためには何をすればよいのか、……これらの諸項目を中心に具体的な発表と熱い討議が行なわれました。

シンポジウムは、名古屋市

ポストン美術館設立準備委員会の小倉忠夫常任顧問の司会で進められ、次の五人の講師の発表がありました。この内容を簡単に紹介いたします。東京国立近代美術館の植木浩館長は、現在の日本の社会全体を表すキーワードの情報化、国際化、高齢化の三つに、新しく文化化が追加されるべきであること。最近の文化志向の大きな流れの中で、文化の宝庫であり、情報基地の博物館が非常に大きな役割を果たすことができる立場にあること。このような新しい文化価値を展示し創造する場が博物館であり、作品の価値と観覧者の価値とが衝突する緊張した充電の場で、一方では文化を楽しむ放電の場が博物館であると述べられました。

教職員生涯福祉財団の諸澤正道理事長は、国立科学博物館十年の経験から来館者と展示のレベルがちがはぐであつてはお客様は来てくれない。そして、年一回来た人は二回、二回の人は三回来るように興味を持たせ、来た人にそれぞれ十分な教育機能が發揮できる展示をすることの大事さを強調され、これからは特に子供を中心とする友の会のメンバーに対する教育活動と、細々でも長く続けていただくボランティアと協力してやっていける博物館になることが必要であると述べられました。

大原美術館の藤田慎一郎館長は、博物館等施設に対するお客様の好みは多様化しており、美術館が人を選ぶのではなく観覧者が美術館を選択する時代となったこと。博物館のパート化が言われ、ただ資料を展示しているだけでは過去の姿である。友の会やボランティアの活動以外に、ワークショップやレストランもつけ足してはいけない。講演会や詩の朗読、音楽会、またファッションショーなども行なわれ、美術館が美術品を鑑賞する場所というよりも楽しい「知的アミューズメント」としての役割を果たすことが期待されていると述べられました。

中川志郎茨城県自然史博物館参与は、ロンドン動物園など外国の例などからブームを呼んだ動物園や水族館にも閉鎖の危機が訪れていること。お客様が来るといって考えでなく選んで来ていることを認識し、誰のための施設なのか？、お客様の需要にこたえているだろうか？。どんなにいい仕事をして、お客様が来てくれなければゼロなので。基本となる大会テーマ四項目を常に自問自答する必要があります。と述べられました。

兵庫県立近代美術館の増田洋次館長は、美術館はユニークな企画展示と人に優しい所で作らなければならないこと。これまで来られなかった身障者のためのスロープや車椅子の整備と、盲人にも美術鑑賞してもらえぬ手で触れる展示品と点字の解説文、その上、これらの観覧者を介護する職員やボランティアが重要であること。人に優しいことをするのは、自分が豊かになることだと話されました。

また、これらの発表をもとに行われたフォーラムは、司

（事務局長 中田幹雄）

平成五年度の第41回全国博

物館大会は、北海道大会として平成五年十月二十日と二十一日の両日、札幌市教育文化会館を会場にして開催の予定です。すでに、北海道博物館協会も共催団体として参加が決まっております、一人でも多くの会員の皆様の参加をお願いいたします。また、大会運営についてもご意見がございましたら、どうぞ、事務局にご一報ください。（事務局）

学芸職員研修会に参加して

平成四年度の学芸職員研修会が、「地域学(郷土学)をどうすすめるか」のテーマで、10月22日から24日にかけて上士幌町の糠平温泉で開催された。今年の一月に採用されたばかりの私にとって、非常に意義のある参加となった。文を始めるにあたって、まず最初に研修会の運営で万全の態勢を執られた上士幌町立ひがし大雪博物館と上士幌町教育委員会の方々に、心から御礼を申し上げたい。

研修会初日の22日の夜には、自由参加で「北海道中央高地の自然史」として知床博の合地さん、帯畜大の久保田さん、層雲峡博の保田さん、糠平の松田さん、そして地元東大雪博の川辺さんから大雪の地質と動植物について話題の提供があった。専門的な内容であったためか、総合討論では自然史系の方々と人文系の方々の論議は必ずしもうまくみ合ってはおらず、一時は内心

野さんが論理を超越した驚くべき力で何とかまとめてしまった。これには全く驚かされたが、どのようなことに落ち着いたのであつたか、どうも思い出せないでいる。翌23日には、テーマに沿って講演や提言そして実践の報告があつた。まずは帯畜大の近堂祐弘先生から「地域博物館に望むこと」と題する基調講演。先生は地域博物館の役割を、郷土学のセンターとして対住民では多様な要求にこたへることであり、対地域外には地域の基礎的な情報の提供であると位置づけた。その上で、黒曜石の年代測定への顕微分光光度計の応用例を紹介し、新しいテクノロジーが旧来の博物館のあり方を大きく変える可能性を示唆された。次いで帯畜大の辻先生から、「十勝百科辞典の取り組みについて」と題して提言がなされた。辻先生はまず地域をつぶさに調べ、問題を掘り起こし、その問題を解き、地域の

ありようを組み立ててゆく地域学の理念を明確にされた。そして十勝百科辞典は地域学の一実践例であり、その目的は十勝学の確立であつたと実践の経緯を詳細に話された。最大の問題点は住民の自己主張と編集上の客観性とのぶつかりだつたため、これからの

地域学の展開は困難だとも予測された。その理由としては、地域の確立はもはや幻想とまで思える程に地域の主張が小さくなったこと、国際化の風潮の中で、世界が人々の視野から地域を押しだしてしまつたこと、そして利他的な風潮が台頭してきたことなどであつた。ならば地域学の拠点として、博物館の社会的役割の重要性は増しこそすれ軽減することは無いであろう。

午後、地域学に積極的に取り組んでおられる根室の川上さん、名寄の鈴木さん、土別の水田さん、浦幌の後藤さん、そして帯畜の内田さん達学芸員の実践報告があつた。研修会のテーマの設定もあろうが、いずれの報告も、どのような点に集束していた。初学者の悲しさゆえ、どの様な必要性があつてそのような活動を行うのか判らない。きつと暗黙の了解があるのだろう。しかし、議論を本当に実りあるものにするには普遍化への試みが必要で、そのためには

理念を明確にした上で実践例を述べるのが不可欠なのであるまいか。

この夜の交流会ではアルコールを片手に、学芸員それぞれが抱える様々な問題について、本音で討論がなされた。この時の論議は、先輩学芸員諸氏がどのような問題に取り組んでいるのかを知ることができ、私にとって特に有意義であつた。痛感したのは、博物館の仕事とは問題解決の積み重ねであり、それを実践してゆく原動力は地域に対する愛着と情熱なのではないか。それにして、大変な世界に頭を突っ込んだものだと思われた。

最終日の24日は「ライマンルートをとどる」と称し、ひがし大雪博の川辺さんの案内で音更川にそつて巡検を行った。要所で専門家の説明が加わり、非常に楽しいものであつた。大雪の自然もはや手つかずではない。人間によつてズタズタにされてはいるがそれでも状態は低地よりは遙かに良好であつた。



（厚真町 岡崎克則）

博物館の外郭団体を育てよう

近年、博物館を支える外郭団体の運営協力会や博物館友会などの基盤を強固にし、ミュージアム・ビジネスを発展させようとする動きが顕著である。

従前から博物館友の会などの組織はどの施設でも型どおりに設けられ、似かよった活動をしていたが、これらは一般には任意団体であって、歴史も浅く、資金も乏しく、館側もまた、担当者まかせで事業の育成に熱心さを欠く恨みがあった。

欧米先進国の博物館を援助するミュージアム・ソサイエティなどの運営組織とわが国の組織を比較してみると、その開きの大きさが容易に判断できよう。

その基本は組織の基盤、つくりができているか、否かにあることは明白である。組織が大型の資産等を寄附金として受入れる法的枠組みとボランティア活動を助長する社会的成熟度の問題もある。

もしも環境が整うならば、

わが国の運営協力会や友の会も法人格を得て、基盤整備からやり直しするがよい。

道内では道立近代美術館に昭和五十八年、美術館協力会が法人化され、ボランティア解説やミュージアムショップ事業を通じて、館活動を支援し、一定額の資金も提供している。これは外郭団体として先進的な活動のモデルといえるものである。

ときに、道開拓記念館と道



開拓記念館のミュージアムショップ

開拓の村をカバーする外郭団体の場合を例示してみたい。記念館は開館十年後、友の会を設け館事業をひろめる努力をなしたが、組織自体を内部にとりこみ、また経済基盤もきわめて弱く、担当者も紋切り型の運営に終始したため、館を支援する強力な外郭団体への発展は望み薄い状態にあった。

そこで、平成元年以来、過去の事業運営と組織を検証し、徹頭徹尾発想の転換をはかる策を講じることにした。

まず、平成元年以来、過



開拓記念館・開拓の村文化振興会設立総会 '90.12月
於 北方圏センター

すなわち、組織を任意団体から社会法人への法的基盤を与え、運営の財政を固める基金の集積に全力を傾注した。

幸にして周囲に理解者も多く、法人の認可をうけ、基金造成も維持会員、終身会員の積立て会費、寄附金も徐々に集まり、昨年、二千万円の財政基盤をつくり終え、今後も基金づくりが継続される。

名称は友の会から文化振興会に改まり、会員も一千名を擁する団体へ脱皮したことであり、先づ事務局の体制を

強固にする必要があった。総会で選任され、登記を終えた理事の方々も二十数名をかぞえ、各々が研修、出版、ミュージアムショップ事業などの任を受け持たれ、活動が開始された。

事業活動が活発化すればする程、人手も必要になる。この法人を永続させるためには相当額の人件費も必要である。その手当ては収益事業によってカバーしなければならぬ。バランスのよい舵取りを如何にすかが課題となる。

さて、道博協が当面する課題は多いが、各館の友の会の活動を助長する研修会も開かれてよいのではないかと。さらに道博協の音頭で、道内の現場の責任者で組織する「博物館友の会協議会」を設立させ、活動の情報交換、出版物、ミュージアムグッズの相互仕入れ、法人化のための研修会をもつなど、新しい時代に適応できる博物館を支援する強力な外郭団体を育てたいものである。

北海道博物館略史(9)

(5) 農業仮博覧会と物産共進会



北海道物産共進会 - 函館 -

明治期の主な博覧会・共進会

〈農業仮博覧会〉

会	期	場所	出品数量	来観者数
明治11年10月15日		札幌	763	
12年10月11日～15日		函館	2,906	10,988
13年10月1日～5日		札幌	3,841	10,853
14年10月21日～26日		函館	3,073	14,955

〈札幌・函館・根室3県連合農業仮博覧会〉

明治15年10月21日～27日	札幌	2,440	7,711
-----------------	----	-------	-------

〈北海道物産共進会〉

明治16年10月21日～28日	函館	3,417	12,349
17年10月21日～27日	札幌	2,809	12,548
18年11月2日～8日	根室	3,429	—
19年10月15日～26日	函館	3,054	—
20年7月25日～8月3日	札幌	1,985	10,168
25年8月1日～31日	札幌	11,222	71,228
39年9月10日～30日	札幌	13,438	140,703

明治期の北海道の博物館施設が、常に開拓政策の一環として設置され、運営されたことは既にふれたとおりであるが、同じく開拓・勸業政策を推進する目的で開催されたものに農業仮博覧会と物産共進会がある。明治期に開催された主な博覧会・共進会は表のとおりである。

最初の博覧会は、明治十一年に札幌の後志通(現在の大通)で開催された第一回農業仮博覧会で、その目的は「農事奨励」にあり、出品は「人工造ヲ論セス総テ管内人民ノ農業ニ属スル諸般ノ物品」とされ、農業用家畜、穀物および牧草の種子、野菜、果実、絹繭、牛酪、器械類が陳列されたほか、プラウによる耕耘、大鎌による草刈りなどの競技も行なわれた。

その後、毎年札幌と函館で交互に開催され、毎回一万人以上の来観者でにぎわった。明治十五年には三県連合の博覧会が札幌で開催されたが、会場には完成したばかりの札幌博物館(現在北大植物園内の農学部附属博物館)が利用されている。明治十六年から北海道物産共進会と改称し、根室でも開かれた。

明治二十一年から数年中断したが、明治二十五年に札幌の中島遊園地(現在の中島公園)で再開された。出品者四三三三人、出品点数二一、二二

二点、会期八月一日～三日、来観者七、二二八人と従来の共進会より著しく規模の大きなものであった。陳列品は四部に大別された。第一部農業・山林及園芸、第二部水産、第三部礦業、第四部工芸である。この時に第一部の陳列場にあてられた第一館が、翌年開設された北海道物産陳列場の建物として利用されたことは既にふれたとおりである。この後、地方での共進会が盛んとなるが、全道規模のものは明治三十七年に札幌で開催された北海道畜産共進会と北海道果樹品評会、同年岩見沢で開催された北海道蚕糸会品評会など分野別の共進会に限られていた。しかし、明治三十九年に至って北海道農会、北水協会、北海道蚕絲会、北海道畜産協会、北海道林業会、北海道園芸協会の六団体共催の北海道物産共進会が開催された。

場所は札幌区中島遊園地(北海道物産陳列場敷地とその周辺)、会期九月十日～三十日、出品数一三、四三八点

(外に参考品二、五八八点)、来観者一四〇、七〇三人、経費四九、二五円という明治期最大の共進会であった。その目的は「本道に於て採取、産出、育成、製造したる物品を募集して其審査を行ひ又公衆の観覧に供して本道生産業の発達を図る」ことであった。出品は農業、畜産業、林業、水産業、鉱業、工業の六部に分類され、陳列館は北海道物産陳列場のほかに、木造二階建の建物が新設され、共進会終了後は、北海道物産陳列場の第一館として利用された。

以上のように物産共進会の陳列場として建てられた施設が、その後は常設の物産陳列場として活用されたことは、注目すべきことである。

〈主な参考文献〉
関秀志「明治期における北海道の博物館(2)」(北海道開拓記念館調査報告「第三〇号、平成三年三月」)
(北海道開拓記念館 学芸部長 関 秀志)

館園紹介

穂別町立博物館

穂別町は、胆振支庁の東の端にあります。日高山脈と石狩平野(勇払平野)に挟まれた、面積の90%を山林が占める山間の町です。石炭産業が華やかだった昭和三十年代のなか

には、人口が二万人を越えていましたが、炭鉱の閉山にもない過疎化が進む中で、町外と結ぶ唯一の経路に近かった国鉄富内線も、昭和六十一年に廃止されてしまいました。

一方、昭和五十年、町内に住む荒木新太郎氏が採集した脊椎動物化石は、翌年になって佐藤昌人(苫小牧青少年セ

ンター)指導員と佐藤隆久(穂別町立仁和小学校)教諭によって再発見され、鑑定を依頼された長谷川善和(国立科学博物館)主任研究員によって「白亜紀後期の海棲爬虫類の緒状になった前・後肢いづれかの骨格の一部」であると確認されました。



展示室

穂別町では「穂別町首長竜化石発掘調査団」を結成、現場に残存する長頸竜化石を発掘し保全を行うとともに仲谷英夫(北海道大学大学院・当時)氏に研究を依頼、官民一体となって関連の化石を収集・保存する運動が進められました。そのような中で、長頸竜・モササウルス類・ウミガメなどの中生代の古生物の他に、デスマスチルスやクジラなどの新生代の古生物も発見され「穂別町で保存」されるようになったのです。

同時に、町内の学校では、「地元で産出する化石を教材」とする授業が行われ、町民の間では収集された化石を保存・研究・展示する博物館建設の運動が高まりを見せていま

した。その結果、昭和五七年になって穂別町立博物館が開館、小さいながらも毎年、穂別町全人口の倍の一万人を越える観覧者を数えました。昭和六三年から始まった穂別町新総合開発計画の中で、市街道々幅は「進化の路」計画として姿をあらわし、廃止された鉄道に代わる国道二七四号(石勝樹海ロード)の開通に合わせて穂別地球体験館も開館しました。一方では、町立病院に隣接して、病気にかからないことを目的とした「ふれあい健康センター」も、保健婦の活動の拠点として設置されました。昭和五三年に制

定された「人間健康宣言の町」づくりが意味を持ち始め、大きな意味で、全てが「地球と生命(=人間が生物として健康に生きること)をテーマとして動き始めたのです。

穂別町立博物館も、これら町の動きに合わせて「地球と生命の歴史」をテーマとして常設展示を更新し、平成四年四月二九日に活動を再開しました。これまでの、おおかたの評価であった「クビナガリ」の脱却するため

ることを展示の基本に置く。実物は「穂別地域産」にこだわり、模型は「生きていたときの姿」にこだわる。そして、現在の種々の生き物達の関係と同じく、過去の「古」生物達にも同様の生態系としての関連があったこと、さらに、それらは数十億年も昔から現在にかけて面々と続く「生命の歴史」の一頁一頁であることを理解させる博物館とする。

実際の展示には、かなり難解な概念もあれば、児童向けの童話(アニメ)もあり、狭い展示室の割には内容豊富で、しかも狭さを感じさせないように配慮してあります。しかし、再開以来六ヶ月で観覧者総数は約二万九千人にのぼり、観光シーズンの連休には展示室内は歩くことにも不自由な程です。今後は、見学者数もおちつき学習に適切な状態になってゆくことと思えますが、隠しテーマを見破るには、ぜひ、平日の人の少ない時間帯に観覧なさることをおすすめします。



穂別町立博物館全景

別町全人口の倍の一万人を越える観覧者を数えました。昭和六三年から始まった穂別町新総合開発計画の中で、市街道々幅は「進化の路」計画として姿をあらわし、廃止された鉄道に代わる国道二七四号(石勝樹海ロード)の開通に合わせて穂別地球体験館も開館しました。一方では、町立病院に隣接して、病気にかからないことを目的とした「ふれあい健康センター」も、保健婦の活動の拠点として設置されました。昭和五三年に制

定された「人間健康宣言の町」づくりが意味を持ち始め、大きな意味で、全てが「地球と生命(=人間が生物として健康に生きること)をテーマとして動き始めたのです。

穂別町立博物館も、これら町の動きに合わせて「地球と生命の歴史」をテーマとして常設展示を更新し、平成四年四月二九日に活動を再開しました。これまでの、おおかたの評価であった「クビナガリ」の脱却するため

実際の展示には、かなり難解な概念もあれば、児童向けの童話(アニメ)もあり、狭い展示室の割には内容豊富で、しかも狭さを感じさせないように配慮してあります。しかし、再開以来六ヶ月で観覧者総数は約二万九千人にのぼり、観光シーズンの連休には展示室内は歩くことにも不自由な程です。今後は、見学者数もおちつき学習に適切な状態になってゆくことと思えますが、隠しテーマを見破るには、ぜひ、平日の人の少ない時間帯に観覧なさることをおすすめします。

実際の展示には、かなり難解な概念もあれば、児童向けの童話(アニメ)もあり、狭い展示室の割には内容豊富で、しかも狭さを感じさせないように配慮してあります。しかし、再開以来六ヶ月で観覧者総数は約二万九千人にのぼり、観光シーズンの連休には展示室内は歩くことにも不自由な程です。今後は、見学者数もおちつき学習に適切な状態になってゆくことと思えますが、隠しテーマを見破るには、ぜひ、平日の人の少ない時間帯に観覧なさることをおすすめします。

〔穂別町立博物館利用案内〕

★開館時間

午前九時三〇分～午後四時

三〇分

★休館日

月曜日・祝日の翌日・毎月
月末・年末年始（十二月三
〇日～一月六日）

★観覧料

一 般 三〇〇円

小中高生 一〇〇円

未就学児童は無料（大人の
引率が必要）

*十人以上は団体料金

一 般 二〇〇円

小中高生 五〇円

★交通

*千歳空港から穂別行き直
行バス（二本／一日往復）
…一時間二分

*JR日高線鶴川駅から、

道南バス（穂別営業所行
き、富内行き、日高ター
ミナル行き）…一時間

★問い合わせ先

〒〇五四一〇二 勇払郡穂

別町字穂別八〇一六

☎〇一四五五-五三一四一

〔穂別町立博物館〕

学芸員 地徳 力

館 園 紹 介

岩見沢郷土科学館

当館の前身である郷土資料室は市民会館別館の一部を改装し、昭和五十一年に開設された多くの市民に親しまれてきた。この間、市民からの善意と愛郷精神により貴重な資料が多数寄贈され展示、保存してきたが、展示室及び、収蔵室の狭隘と老朽等から教育機能が

十分に果せない状況となり昭和六三年から「郷土資料館建設を考える会」の答申を基に

新らしい施設づくりの検討が進められてきた。平成二年ふるさと創生事業として、先人の歴史や文化の伝承を図る郷土資料館に天文、科学を学習する機能を加えた複合施設として岩見沢郷土科学館建設が決定され三ヶ年計画で着工、平成四年七月にオープンした。

当館は雪の結晶をモチーフとした三階建、総面積二、六九八㎡で大遊園地を中心に、小中学校の遠足コースや家族連れが行楽地となっている豊かな自然に恵まれた「いわみざわ公園」に位置している。

展示会場の一階常設展示室は先人の歴史から学ぶ「岩見沢のあゆみ」を始め、市民の生活に大きくかわって来た水・雪・米を主要テーマとした気象、農耕などの情報が幅広く紹介、展示されている。更に、おもしろ科学の体験、コンピュータと遊ぶコーナー等は、遊びながら学べるも

のとして人気が高い。

二階収蔵展示室は市民提供の歴史的生活用具を中心に、先人達の血や汗のにじんだ農業、鉱業、林業等の用具、機器類や市指定文化財、岩見沢冷水、東山遺跡から発掘された縄文時代の土器、石器が陳列されている。

同階の特展コーナーでは弥生文化の代表的な佐賀県吉野ヶ里遺跡群より発掘された「カメ棺」、「副葬品」の展示のほか、ビデオ映像による遺跡の紹介を通じ、古代のローマにふれていただけるよう配慮している。また同階に特別展示室を設置し、各種講座、

企画展等、巾広く活用できるように工夫され、各種視聴覚機器も整備している。

三階にはコンピュータと音響システムを駆使した映像で天体、宇宙の世界を楽しめるプラネタリウム室があり、百の固定席、直径十二mのスクリーン規模で児童、生徒の学習をはじめ大いに利用され、大いに喜ばれている。

この施設は岩見沢市民をはじめ、南空知広域圏住民の生涯学習の場とし、また、二一世紀を担う子ども達が科学、文化を通じて創造力を高め、育む場として大きな期待が寄せられている館である。



岩見沢郷土科学館全景



常設展示室

★開館時間

★休館日

九時三〇分～一七時〇〇分
月曜日、祝日の翌日、祝日が月曜の場合は火曜日。十二月三十一日～一月五日

★入館料

一般 三〇〇円
小中学生 一〇〇円
高校生 二〇〇円
プラネタリウム観覧料
一般 二〇〇円
小中学生 一〇〇円
高校生 一五〇円

団体割引は二〇名以上でいづれも二割引

★交通

JR岩見沢駅前より中央バスで一五分(いわみざわ公園終点で下車) 一六〇円またはタクシー(一〇分)

★問い合わせ先

〒〇六八

岩見沢市志文町八〇九

☎〇一六・三三・七七一七〇

(岩見沢郷土科学館)

館長 黒川 和悦

◎平成四年度日本博物館協会

顕彰について

平成四年十一月五・六日、徳島市の徳島県立博物館で開催された第40回全国博物館大会で、下記の方々が表彰されました。

1号規定

アイヌ民族博物館

山丸 武雄

北海道開拓記念館

伊東 博

亀山 修

為岡 進

◎北海道美術館学芸員研究

協議会の再出発

同会は、道立美術館が5館になり、共通の研修の場を、ということから平成3年4月に生まれた道立美術館学芸員研究協議会が、道内の美術館学芸員に輪をひろげ、4年4月に組織化されました。

道内には道立のほか市立や財団、私立の美術館があります。学芸員の交流、研修の機会には美術館学芸員の絶対数も少なく、参加者が限られる道博協大会の場合などでも必ずしも期待にそうものではない

ませんでした。

そこで、この会では、交流

研修の前提として、当面、各地で美術館の仕事に励んでいる学芸員の存在をそれぞれが知り、理解を深めることをねらいとしています。11月現在の会員数は33名で、事務局は道立近代美術館が担当しています。9月には再出発の第1号に当たる会報『NORTH

ERN OWLS』4(8頁)が発行されています。同会の今後の発展が期待されます。

◆新入会員◆

協会長宛送付。

8・7 道教委、浜頓別町、

提出。

8・11 事務局打合わせ。

8・29～30 道北地区博物館

等連絡協議会学芸員研修

会(増毛町・暑寒別)。

9・5 平成5年度道博協学

芸職員研修会の開催につい

て、江別市教委宛協力依頼

状発送。

9・9～11 平成4年度アイ

ヌ民俗文化財専門職員等研

修会(主催・北海道文化財

保護協会)後援。

9・10～11 4年度青少年科

学館職員研修会(千歳市民

文化センター)。

9・11 臨時役員会(開拓記

念館)。

9・25 『北海道美術館学芸

員研究協議会会報』No.4収

受

7・22 『学芸職員部会ニユ

ース』No.37收受。

7・23 会長、事務局長次年

度大会開催地挨拶(滝川市)。

午後、岩見沢郷土科学館落

成式に出席。

8・6 4年度日博協顕彰候

補者申請書(4名分)を日博

会(稚内市立ノシャップ寒

流水族館)。

10・22～24 学芸職員研修会

(上士幌町東大雪博物館、

中田事務局長出席)。

10・23 『道博協ニュース』

第39号発送。

11・5～6 第40回全国博物

館大会(徳島市・徳島県郷

土文化会館、渡邊会長、中

田事務局長出席)。

11・7～8 博物館活動交流

推進会議(道東プロック学

芸員等会議、根室市・根室

グラントホテル、氏家事務

局員出席)。

11・10～11 博物館活動交流

推進会議(全道プロック館

長等会議、函館市・五稜郭

タワー、中田事務局長、丹

治次長、小林事務局員出

席)。

11・10、12、13 平成4年度

第7回北方民族文化シンホ

ジウム(主催/財)北方文化

振興協会・オホーツク国際

流水ロード網走市実行委員

会)後援。

11・11 第2回役員会(函館

市)。